

阿倍野区	「傘体操」の魅力を発信！ 〜コロナ禍でも認知症の人の集いの場づくりへ〜	1
大正区	コーヒーの香りと「会えてうれしい！」の声 〜認知症カフェ「マロンカフェ」を開催〜	2
都島区	みんなで考えよう「気づきのポイント」どこをみる？ 〜地域福祉コーディネーター×専門職編〜	3
港区	DVD鑑賞と出演者の講義で深める障がい者理解 〜ネットワーク委員長・泉守りコーディネーター合同研修会〜	4
	ICTの可能性・魅力を共有 〜市・区社協でラウンドテーブルを開催〜	5
	推進計画とコロナ禍の現状から今後の実践を描く 〜第44回 大阪市地域福祉活動推進委員会〜	6
	「コロナでもこれならできる！」活動メニュー集③	7
		8

大阪の 社会福祉

2021.10

797

The social welfare
in OSAKA

社会福祉 大阪市社会福祉協議会

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

傘を使って自然にソーシャルディスタンスを確保

阿倍野区

「傘体操」の魅力を発信！

〜コロナ禍でも認知症の人の集いの場づくりへ〜

阿倍野区社協では、平成30年から、月1回、MCI（軽度認知障害）や認知症初期の人が集い、運動や体操、おしゃべりを楽しむ場、「脳とからだのワーク」に取り組んでいます。一人ひとりの状況を丁寧に把握し、適切な介護・医療サービスにつ

なぐことが目的です。「MCIや認知症初期の人が通える場所が少ない」という課題意識から立ち上げ続けてきたこの集いの場を、コロナ禍でも対応できるようバージョンアップしたのが「傘体操」です。（2面につづく）

HB

娘からの情報で急いでインターネットを開いた。息子がファミリーニュースに出て

いるというのだ。ごくごく普通のサラリーマンがマスコミに取りあげられるのは、犯罪を犯した時くらいだろうと思っていたが、そうではなかった。息子の勤める企業の活動を社会にアピールする内容の一環と分かってホッとした。企業を代表してマスコミに取りあげられる息子を持った親としては少しうれしくなった。一方で思い出したことがあった。犯罪を犯して服役後、きちんと社会復帰した男性の話だ。こどもが学校でインターネットを習い出した。もし先生がお父さんを調べてみようと言ったら、もう服役も済ませて、社会復帰をしているのに、新聞に載った犯罪者としての名前は消えずに残っている。▼服役中も離婚を覚悟していたのに、妻は待っているといってくれた。こどもにも「仕事で出張」で押し通してくれたのに、その犯罪がこどもにばれたらと思うと心配で仕方なかった。幸せだった家庭がインターネットの情報で一瞬にして崩れることもある。▼情報は人を幸せにもするが、不幸にすることもある。

(石)

自然にソーシャルディスタンスがとれる「傘体操」

昨春、「脳とからだのワーク」を広げたいと考えていた矢先に、新型コロナウイルス感染症が流行し、3年間、欠かすことのなかったこの取組みも、休止を余儀なくされました。その後、新しい生活様式を心がけながら、集いの場も少しずつ再開しましたが、閉じこもりがちになった高齢者は、すぐに集いの場に足を運ぶことが難しくなっていました。

そこで「脳とからだのワー



課題や進捗状況について職員同士で度々話し合っています

ク」をベースにしながら、コロナ禍でも安心して集える方法はないかと創り出したのが「傘体操」です。傘同士が当たらないように椅子に座るだけで、自然にソーシャルディスタンスを保つことができます。また、病気を早期発見できる場にもなっていて「ご夫婦でお見えになる方やここで血圧が高いことに気づいて病院受診につながる例もありました」とあべのオレンジチーム・認知症地域支援推進員の菱谷久子さん。

主体的に取り組むことの大切さ

「脳とからだのワーク」の特徴は、参加者自身が検温や血圧を測定し、健康状態を記録したり、呼ばれた名前を自分で決めたりするなど、参加者の主体性を重視し、本人の能力を最大限に引き出していくことにあります。

「つい手助けしたくなるのをぐっと我慢し、一方的な支援者ではなく、パートナー」という視点で寄り添うことで、本人に自信が生まれ、いきいきとした表情になります」と認知症強化地域包括支援センター・認知症

施策推進担当の大石康子さん。

「家に閉じこもっていたみなさんがここにきて、笑顔でおしゃべりして、楽しかったと感想を残してくださることがうれしくて。介護サービスを利用するようにになると、今度は、ケアマネさんから『デイサービスに

のこと。

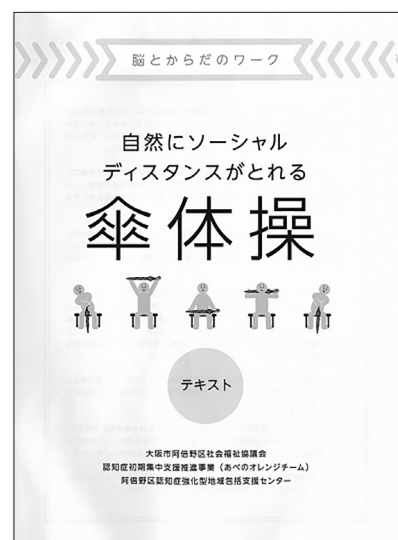
3年間の集大成として「集える場」を広げていきたい

阿倍野区地域包括支援センター管理者の中川小百合さんは、「脳とからだのワークの取



DVD・テキストには、ポイントがわかりやすくまとめられています

順調に通わ
れています
よ」と教え
られ、また
うれしくな
ります」と
大石さん。
加えて「デ
イサービス
でも、一人
ひとりに寄
り添えるプ
ログラムづ
くりの気づ
きや参考に
なればと思
います」と



組みは『とにかくやろう』と始まりました。オレンジチームの活動から課題をあげ、「脳とからだのワーク」を開催して、新たに改良を重ね、みなさんが安心して参加できるよう、送迎を始めた。保険に入ったりしました。そのなかで、歩いて行けるところに、こういう場ができたらいいね、地域にあった形でよりよい「集いの場」ができた。いいねと話しながら、広めていきたいと思うようになりました。まずは、各区のチームオレンジに、3年間のノウハウが凝縮されたDVD・テキスト『自然にソーシャルディスタンスがとれる傘体操』をMCIや認知症初期の人が「集える場」の立上げのツールとして活用してほしいですね。一方で、デイサービスなどの施設から他区も含め、意見をもらいながら認知症の方への支援を充実していきたいと考えています」と話しました。

「コーヒーの香りと「会えてうれしい」の声

「認知症カフェ」マロンカフェ」を開催」

大正区社協では、7月27日に、認知症カフェ「マロンカフェ」をオープンカフェで開きました。コロナ禍で中止せざるを得ない状況が続く中でも「楽しみに待っていてくれる人がいる」と、感染予防対策を講じての開催に至りました。

援センター・チーフの藤本幸枝さん、同センターの平井美穂さんに話をうかがいました。

再開と感染リスクのジレンマ

マロンカフェの立上げは、平成27年10月。市内の認知症カフェの中では後発組であり、「区内に認知症の人たちの居場所が必要」「気軽に立ち寄れる場所になりたい」という思いが募った頃でした。はじめは2か月に一度、その後毎月開催となり、毎回10人ほどの人がやってくる居場所となりました。

しかし、新型コロナウイルスの感染のため、令和2年3月以降のマロンカフェは中止に。

再開の目途が立たないまま、毎月のように電話

で中止を伝えていました。その際、カフェの利用者から「行き場がなくなつて残念」という声を聞くことができました。また、つながりを途絶えさせないよう、チラシを持って家を訪ねた時には、その訪問をよろこんでくれて話が止まらない方もいました。

藤本さんと平井さんは、「カフェを再開したい」気持ちと「無理に開催して感染者が出てしまったら」という気持ちのジレンマに悩みました。

笑顔あふれた久しぶりのマロンカフェ

コロナ禍でも、どうすれば安心して参加してもらえるかを考え、区社協内で話し合った結果、「屋外」「テイクアウト方式」で、「体温測定」や「住所記載」等に協力いただくことで、令和3年7月に久しぶりに開催することを決めました。

当日は気温が高く暑い日でしたが、10人がマロンカフェに来られました。大正区家族介護会の方にも手伝っていただき、



大正区地域包括支援センターの平井美穂さん(左)、チーフ・藤本幸枝さん(右)

豆から挽いた美味しいコーヒーを渡すことができました。また、大正西ランチ(ビオスの丘、済生会オレンジチームの協力のもと、ちよっとした脳トレの講座もあり、みなさん楽しそうに参加されました。

来てくださったみなさんからは、「外に出るのが久しぶり」「元氣だった?」「会えてうれしい!」といった声が聞かれ、みなさんの笑顔にスタッフも元気をもらいました。

コロナ禍が収束し、定期開催に戻れることを願いながら、次回は秋以降の開催を予定しています。

【マロンカフェとは】

大正区地域包括支援センターが主催する、認知症の方やその家族の方、地域にお住まいの認知症に関する理解を深めたい方を対象に開催しているカフェ(集いの場)です。

認知症の方を介護している、または介護していた方も参加されているため、「こんな時はどうしたら良いのか」「こんなことあるよね」と経験を話していただいたり、これまで認知症の方と関わったことがない方でも、認知症に対してより身近に感じていただくことができる場所になればと思っています。



マロンカフェののぼりと看板



脳トレも一緒に楽しみました

みんなで考えよう“気づきのポイント”どこをみる？

地域福祉コーディネーター×専門職編

気づきを深める時を
重ねて

8月20日、都島区社協にて、令和3年度第5回「地域福祉コーディネーター連絡会」が開催されました。「みんなで考えよう“気づきのポイント”どこをみる？」と題して、気づきの視点を出し合い、話し合いました。実施する背景には、個々のスキルや経験に頼りがちであった二ブキヤッチを丁寧



「お互いの熱を感じつつ一緒に考えたい」と集合型で開催。感染防止のため、4部屋をリモートでつなぎました。

に可視化することで、コーディネーターと専門職の違いを知り、それぞれの強みを生かしながら、声にだせないSOSを見逃さない地域をつくっていくことを目的にしています。1回目は訪問時やつどいの場、道で出会った時の気づきの視点を、2回目にはDVDを視聴後、これらに対する視点について話し合いました。

3回目となる今回は、区役所職員・地域包括支援センター職員・その他の専門

職も交えて、グループワークでそれぞれの立場や状況による気づきの視点を付箋に自由に書いて出し合い、共有しました。当日は、新型コロナウイルス感染症予防のため、4つのグループが各部屋に分かれ、オンラインで共有する時間を持たしました。

玄関先から、
五感をフル回転

各班ではまず、訪問時にどのようなところに気づきのポイントがあるのかを話し合いました。「玄関の植木」「カレンダー」「臭い」や、ご本人に関しては「目が合わない」「立ち方・歩き方が不安定」「爪や手の汚れ」「ずっと同じ服を着たまま」など、話さなくてもわかる変化や気づきが多数あげられました。

専門職としての志と
コーディネーターへの思い

意見交換の中では、専門職からは「障がいに応じてご自身ができること・苦手なことは、いろいろあります。専門職としては、その方のことを深く知り得るだけ理解し、その方の『あたりまえ』を知り、同じ『ものさし』で考えることを意識しています」。また、コーディネーターに向けては、「支援が必要な人の暮らしを知ろうとする際に頼りにしているのが、過去や人間関係、生活などを日々の関わりの中でよく知っている地域の方からの情報です。そのため、



コーディネーターは地域住民としての視点も併せ持つことから、とても頼りになる存在です」との思いも共有しました。

メンバーを変えながら
区全体に広げる

コーディネーターの気づきや情報が、専門職にバトンタッチされ、具体的な支援につながるものが多くあります。「支援のベースとなる気づきがなければ、専門職は進めません。最初の気づきがいかに大切か改めて感じました。コーディネーターと専門職で欠けているピース（情報）を埋めていけば、支援がしやすくなると思います」とは都島区地域包括支援センター管理者の山口理佐子さん。

また、地域支援担当・主査の川原佳代さんは、「こうした話し合いを重ねて、地域住民と専門職等のつながりを広げていきたい。また、メンバーを郵便局、宅配便、ヤクルトの配達の方など、いろいろな人とネットワークを拡張、気づきの視点を共有し、区全体で波長を合わせたいければ、孤立を防ぐ地域力の底上げにつながると思います」と話しました。

今後とも区社協では、地域の方々と専門職等が垣根を越えたつながりを深めていけるようサポートするとともに、このようなさまざまな気づきが区民一人ひとりの生き方を守っていく、そんな意識の醸成にも努めていきます。

区港 DVD鑑賞と出演者の講義で深める障がい者理解 ーネットワーキング委員長・見守りコーディネーター合同研修会ー

福祉教育DVDを用いた初の研修会

港区社協は、8月19日、ネットワーキング委員長・見守りコーディネーター合同研修会をオンラインで開きました。

区社協では、今年3月、福祉教育のためのDVD『夢をつかめ〜ハコちゃん挑戦〜パラスイマー大向優貴の挑戦〜』（本誌令和3年7月号3面掲載）を

製作しました。今回は、DVDを鑑賞後、そこに出演している生活介護事業所「ゆうゆう美波途」で働く箱崎良徳さんと同施設長の西田卓司さんとの講義を、区社協から各地域と地域包括支援センターやランチ、保健福祉センターなど専門機関へ配信しました。

もっと楽しさを増やしたい

さんとの出会いもあって、欲しい物を買に行ける自由さを満喫し、同じ住宅の人からの挨拶もうれしく感じているとのこと。「もっと楽しさを増やしたい」と箱崎さんは、全身を使いエネルギーに話しました。

気持ちの面から、壁を崩してほしい

後半は、西田さんが箱崎さんへの思いを語りました。「箱崎さんは、脳性麻痺の障がいがありますが、就労を強く希望されています。日常生活の中で『仕事をする』という感覚や意識はとても大切。ボルトを1本1本数えることも、地域社会の貢献になっていることを感じてほしいです」。

また、同施設は、公園でのラジオ体操に地域の方々にも参加してもらうなど、地域と顔の見える関係が築かれています。「ラジオ体操で利用者さんと地域の方が話しているのを見ると、障がい理解のある地域やなあと感じます」と西田さん。

箱崎さんの生活を描いたDVDを鑑賞後、西田さんの質問に答える形で、箱崎さんが一人暮らしの思いを語りました。「一度やってみたかった」と念願の一人暮らしを始めたものの、最初はつらいことが多く、体調を崩し入退院を繰り返していたそうです。5年目になる今は、信頼できる西田

「ゆうゆう美波途のみんなと笑顔でグータッチして、朝から元気をもらっています」とその様子を教えてくれました。

「歩けないことが障がいではなく、社会の方から壁をつくり、障がいにしてしまっているのが現状。地域のみなさんには、気持ちの面から、この壁を崩して欲しい。私たちも、障がいのある人のことを伝え、障がい者理解を深めることで地域の社会資源としての責任を果たしていきたいと思います」と西田さん。

地域でともに暮らす仲間として

講演を聴いた各団体のコメントには、「地域の困りごとと一緒に解決していける関係になりたい」「防災活動のとき、障がいのある人に意見をもらうことがあります。いつでも遊びに来てほしい」といった箱崎さんへのアプローチも。箱崎さんの言動から、人柄や生き方、社会の役に立ちたいという思いが伝わったのかもしれない。箱崎さん自身も終了後、「わかってもらっ



左から、区社協・矢野杏佳さん、生活介護事業所「ゆうゆう美波途」施設長の西田卓司さん、同事業所で働く箱崎良徳さん

てよかった」と話しました。お二人の思いの詰まったDVDの活用について、区社協・地域支援担当の矢野杏佳さんは、「動画なら、言葉では伝えづらいことも伝わります。コロナ禍でのオンラインを活用した福祉教育の推進に向けて、これから小中学校を始め、各種研修会で広く活用していきたいと思っています」と話します。

障がいのある人を地域でともに暮らす仲間の一人と実感できた研修会。誰もが暮らしやすい地域をつくる確かな一歩を踏み出したのではないだろうか。



箱崎さん(右)の思いを誠実に汲み取る西田さん(左)

ICTの可能性・魅力を共有

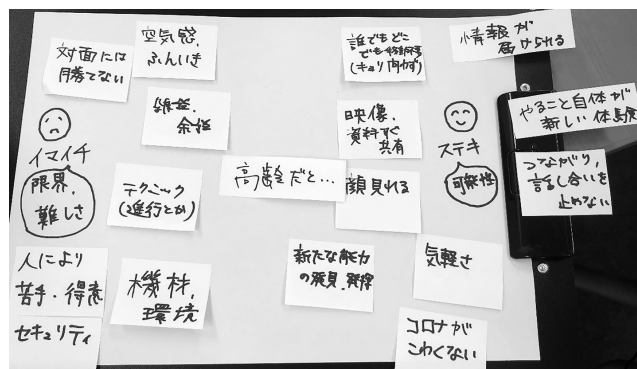
市・区社協でラウンドテーブルを開催

「ICTでもつながりづくりプロジェクトとは？」

市・区社協において、ICTの活用方法を分かりやすくすること、苦手意識を払拭し、活動の促進につなげることや、ICTを活用した活動やつながりづくりに対するチャレンジ精神が醸成され、活性化されることを目的に、区や担当業務の枠を超えて、ICT活用について検討し、発信していくプロジェクトです。

ICT「でも」
つながりづくり

市社協では、「ICTでもつながりづくりプロジェクト」のキックオフ会議となるラウンド



当日共有したICTの「ステキ」「イマイチ」ポイント

ハが参加しました。

Zoomの投票・チャット機能を使つてのアイスブレイクのあと、一つ目のテーマ「ICTのステキなところ（魅力、可能性）・イマイチなところ（限界、難しさ）」を、全員で自由に出し合うことからスタート。

「ステキなところ」は、遠く離れた場所でもつながれる点、特にコロナ禍では感染リスクを気にせずに会議や話し合いができる点という意見が多くあがりました。一方で、「イマイチなところ」は、高齢者や苦手な人にはハードルが高い点、対面に比べて雰囲気づくりや空気感の共有が難しい点、情報漏洩など不安がある点などの意見があがりました。

「ICTのステキなところ・イマイチなところ」(一部抜粋)	
ステキ	イマイチ
・新型コロナウイルス感染症が怖くない ・人との接触を気にせず、気軽につながれる ・距離や場所に関係なくつながることができる ・同じ動画や資料をすぐに共有できる	・慣れている人と苦手な人との差が大きい ・対面よりも盛り上がりにくい ・高齢者が利用するのが難しい ・端末やインターネット環境が必要 ・セキュリティが心配

ICTだからその
情報共有

二つ目のテーマは、「できる

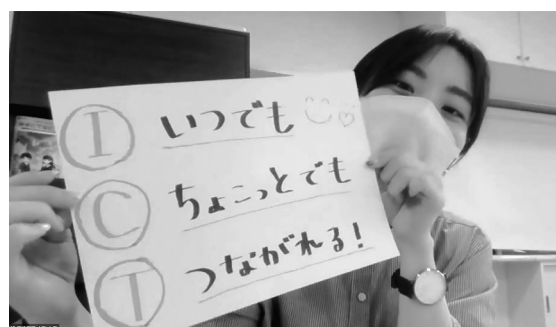
社協職員をはじめ、地域にも ICT のステキなところを発信し、魅力が伝われば活用が進むのでは、イマイチなところを解消するには何が必要かを考え、取り組んでいけばいいのでは、ICT「でも」つながることができれば、活動をより活性化し、つながりを途絶えさせずにいられるのではないかの思いを共有しました。

かどうかはさておき……ICTでこんなことをやってみたい!」「○○があれば……わたし(あなた)にもできる!やろうと思う!」「ICTの可能性を地域にも広げたい!模擬プレゼンを考ええる!」の3つで9つのグループがいずれかのテーマについて話し合いました。全体共有では、手書きの紙を提示したり、Wordの文章を画面共有したり、中にはPowerPointでプレゼン資料をつくり発表したグループもありました。いずれの発表も、やってみたい、やってみようと思ふきっかけになりました。

今後はプロジェクトチームで、今回共有した意見をもとに、ICTを活用したつながりづくりを促進するために取り組んでいきます。本プロジェクト

の推進状況は、本誌でも随時発信していく予定です。

最後



「いつでも ちょこっとでも つながれる」
ICTの魅力を発信することをめざして

グループで話し合ったこと（一部抜粋）
・スマホ講座などを開催し、オンラインツールを使える人を増やしていきたい
・オンラインでボランティア講座を開催すれば、参加へのハードルが下がるかもしれない
・まずは職員が積極的に使うことができるような体験や練習の機会があればいい
・個人情報に配慮してオンライン会議をするためのポイント集があればと思う
・体験会をおこない、分からないところを共有してマニュアル作りに出組む
・地域に広げるためのポイントは、「魅力を伝える（良さを体感してもらう）」と「逃さない（機運の高まりやタイミング）」



最後は「わたしはICT…」で始まる文章で決意表明

推進計画とコロナ禍の現実から

今後の実践を描く

第44回 大阪市地域福祉活動推進委員会

市社協は8月3日に、第44回大阪市地域福祉活動推進委員会を開催しました。今回は、3月に「第2期 大阪市地域福祉活動推進計画」（以下、計画）を策定して以来、初めての委員会となります。

「動き出す、動き続けるには、『きっかけ』と『プログラム』が必要」「ICTツールの活用について、サポートや取組み方法の提案があれば」「福祉教育や、社会福祉法人の公益的な取組みなどは、これまでの延長ではなく、新たに課題を乗り越える方法を市域でまとめ、後押しする必要がある」など、この状況を打破する

まずは市社協から、計画策定後の発信状況を報告。委員からは「各区での会議・研修等で市民・関係者に計画を周知できるチラシ形式の媒体を作成してはどうか」と提案があり、委員会として検討することとなりました。

そのうえで今後に向けて、

「動き出す、動き続けるには、

『きっかけ』と

『プログラム』

が必要」「ICT

ツールの活用

について、サ

ポートや取組み

方法の提案があ

れば」「福祉教

育や、社会福祉

法人の公益的な

この内容と関連して、またコロナ禍が1年半近く続いている状況も踏まえて、さまざまな分野で活動する各委員から発言。「地域ではコロナ禍での活動を工夫して考えているが、中止が続いたり、形態変更した取組みも思わしい反応がなかったり、混乱期に入り、大変厳しい状況



松端委員長(上段左)をはじめ、14人の委員が出席。前日の緊急事態宣言発令により急きょオンライン開催となった

風をよむ

コロナ禍の陰で進行する

少子高齢化

大阪市立大学大学院 生活科学研究科 教授 所道彦

敬老の日には、高齢化の

られている。

データが話題になる。総務省

また、少子化対策も重要で

によると現在、日本の65歳以

ある。人口のデータを見る限

上の高齢者人口は3640万

り、これまでの対策は十分な

人、総人口に占める割合（高

成果をあげていない。家族や

齢化率）は29・1%である。ド

子育てに関する施策が総花的

イツ22・0%、フランス21・

に盛り込まれているが、結果

1%、イギリス18・8%など

の検証が必要だろう。少子化

と比べてかなり高い。そして

社会対策大綱では、重点項目

2040年には、高齢化率は

として「結婚・子育て世代が

35・3%になると推計されて

将来にわたる展望を描ける環

いる。今から約20年前、国立

境をつくる」ことが掲げられ

社会保障・人口問題研究所が

ている。なかでも「若い世代

発表した「日本の将来推計人

が将来に展望を持てる雇用環

口」（2002年1月）の中心

境等の整備」は非常に重要で

推計では、2021年の高齢

あるが、就職に向けた相談支

化率は28・1%、2028年

援だけでは限界があり、非正

に29・1%、2040年は33・

規雇用から正規雇用への転換

2%となっていた。当時の推

が「将来展望」につながるの

計よりも速いペースで高齢化

か注視する必要がある。

が進行していることになる。

現在、コロナ禍によって安

こうした状況を踏まえた対

心して結婚や出産をできる環

応が求められている。年金、

境がますます失われている。

介護、医療といった社会保障

コロナが一段落してからでは

制度改革は不可避である。ま

手遅れになりかねない。こう

た、地域によって高齢化の状

いう時期にこそ「社会全体が

況は大きく異なることから、

結婚・子育て世代を支える」

予測に基づいて「計画」を立

てることが地域福祉には求め

求められている。

「コロナでも、これならできる！」

活動メニュー 3

新型コロナウイルス感染症の流行が長引く中、さまざまな活動を制限せざるを得ない状況が続いています。それでも、「何かをしたい！」「楽しみやつながりを持ちたい！」「そんなふうに思っている方もいるのではないのでしょうか。」

本誌では、「コロナでも、これならできる！」活動メニュー―感染リスクをゼロにすることは難しくても、リスクを低くして活動できるアイデア―を紹介しています。

紹介する活動メニューは、感染のリスクが全くないものではないかもしれませんが、基本的な感染防止対策を講じたうえで、できそうなことからぜひ始めてみてください。

おうちで ボランティア



コロナを気にせずに自宅でできるボランティア活動として、絵やメッセージ、折り紙等の作品や認知症マップを作って、施設などに届ける活動があります。

まずは募集しているところはあるか、届け先はあるか、情報収集してみたいかがでしょう。何かおうちにいながらできることが見つかるかもしれません。

※認知症の人が触ると安心感が得られるといわれる円筒状に編まれたニット小物

参考：令和3年6月号掲載 天王寺区「コロナ禍でも自宅できるボランティア」認知症マップと一緒に作りませんか！

※今号の「こんなことやってます！私たちの施設から」は休載します

令和3年度(第75回)共同募金運動は 10月1日から始まります。



今年も10月1日から、全国一斉に、共同募金運動が実施されます。共同募金会ではこの間、「赤い羽根 新型コロナ感染下の福祉活動応援全国キャンペーン」を実施し支援してまいりました。

昨年に引き続き、本年も、新型コロナウイルス感染拡大により、人と人が距離をとり、つながることが難しい状況ですが、このような時こそ「つながりをたやさない社会づくり」が大切であり、互いに助け合う共同募金の役割が重要と考えます。

今年度の大阪府の共同募金目標額は、歳末たすけあい募金を含めて7億9千万円。府内の市区町村社会福祉協議会を通して行われる、住民のみなさまの身近な地域福祉事業や、社会福祉施設の整備、社会福祉団体・ボランティア団体等の活動支援など、コロナ感染下でも行われているさまざまな福祉事業を支える大切な資金となります。

共同募金は、各ご家庭でのご協力や、街頭での募金活動、店頭に設置された募金箱へのご寄付など、誰もがいつでもどこでも身近に取り組めるボランティア活動です。このような時こそ、是非とも多くのみなさまのご参加協力を今年もよろしくお願いいたします。

心と心をつなぐ赤い羽根



大阪芸術大学 デザイン学科 山口 真希



今こそ福祉に支援の手を！

赤い羽根共同募金

10月から始まる共同募金にご協力よろしくお願ひします



立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

GK

クルマの保険 住まいの保険 生命の保険

www.ms-ins.com

		大阪
令和3年度目標額		790,000,000円
内訳	一般募金	560,000,000円
	歳末たすけあい募金	230,000,000円
令和2年度実績額		570,220,352円

募金運動について、詳しくは、大阪府共同募金会ホームページをご覧ください。

<http://www.akaihane-osaka.or.jp>

赤い羽根おおさか

検索

